

ハビトゥス習得の身体化とはどのようなものか

～現代日本における階級上昇を背景として～

寺本 桂子
TERAMOTO Keiko

はじめに

著者は修士論文「パッケージ化されたハビトゥス習得は可能か～いわゆる『伝統校』と『マナー・スクール』におけるハビトゥス習得の可能性に関する考察～」において、現代日本での2つのパッケージ化されたハビトゥス習得法について考察した。1つは幼少期からの長期的・複合的習得法と、もう1つは成人後の短期的・単一的な習得法である。圧倒的に豊かな環境下でハビトゥスを形成できる前者と、即席習得を目指す後者のそれぞれのハビトゥス身体化への過程や有用性について、階層移動というアイデンティティー・クライシスも視野に入れつつ対比考察した。本論文は、修士論文の中から主に第1章「現代におけるパッケージ化されたハビトゥス習得法」部分に焦点を当てて、修正を加えたものである。近年あらためて格差社会が話題になっているにもかかわらず、現代日本では経済力やパフォーマンス力のある者のセレブ化が一種の社会現象になっている。そこには文化資本としてのハビトゥス習得が背景の1つにあると考えられるが、果たしてハビトゥスを習得して身体化させる、とはどういうことなのか。目に見えるものとして表現することが難しいハビトゥスを、マナーと品格に置き換えながら論じ、現代日本における階級上昇を‘身体化されたハビトゥス’という一面を用いながら考察する。

1. なぜハビトゥス習得について考察しようと思ったのか

著者はなぜハビトゥス習得について考察しようと思ったのか。そのきっかけとなったのは、表面上は平等な21世紀社会において‘アイデンティティー・クライシス’とも言い得る危機的現象が起き始めているのではないかと感じていたからである。現代は「伝統的身分制度」⁽¹⁾が崩れたことにより、「従来の身分制社会とは異なり、能力のある者には上層移動がゆるされる社会（佐藤、2006：137）」となった。著者の言うアイデンティティー・クライシス＝危機的現象とは、このような平等な社会であるからこそ、それを逆手に何か21世紀社会を混乱させる現象が起き始めているのではないかと、いうことを指す。例えば、自分自身の成長を目指すのではなく、外見上の階級

移動などを試みようとする人やその機会が、より増えているのではないだろうか。現代は資質や経済状況などが許せば、形式的には誰もが身分に関係なく希望する学校に入学し、好みの衣服や持ち物を纏うことが可能な時代である。そして自由な消費によって、「新興の中間層はその時々のエリート階級のライフスタイルをなぞ（北山、1999：198）」ることが、より容易になって来ている。「外見重視の考えは、出版物、教育制度を通じて社会の全階層に浸透されていった（北山、1994：78）。」ことを考慮に入れると、この「ライフスタイルをなぞ」ということの1つに、ハビトゥス習得があるのではないだろうか。これらのことから、ダイレクトに物や地位を狙うのではなく、ハビトゥス習得自体がパッケージ化=商品化されていることに、著者は21世紀社会での危機感を持ち始めたのである。

2. ハビトゥスとは何か

では、ハビトゥス (habitus) とは何であろうか。社会学者 P. ブルデュー⁽²⁾ は、著書『ディスタンクシオン』⁽³⁾ の中で、ハビトゥスとはその階級における特有の習慣、行動様式のことであると論じている。竹内⁽⁴⁾ は、「当人にも意識されにくい『心の習慣』(大村英昭) のことである。(中略)「肌」や「気質」と訳してもよいだろう。ハビトゥスは、家庭や学校で長い時間をかけて無意識裡に形成され日常的な慣習行動⁽⁵⁾ をもたらず血肉化された持続する慣習である (竹内、1999：189～190)。」とも述べている。また、子が親と同じような仕事に就くことが多い現象や、親の文化に似ることを、ブルデューは経済資本と文化資本とに着目して解明し、文化的再生産と名付けた。医者の子が医者に、音楽好きの親の子が音楽好きになるように、である。成長過程の環境の中で、「文化資本が相続され、ハビトゥスを共有する社会集団が『再生産』され (佐藤、2006：200)。」て行くのである。

(1) 階層記号としてのハビトゥスとは

では、1で前述した、「新興の中間層はその時々のエリート階級のライフスタイルをなぞ (北山、1999：198)」ことが、より容易になって来た経緯を振り返ってみよう。斎藤⁽⁶⁾ は1900年代初期の人気雑誌⁽⁷⁾ の様子を、「いまならさしずめ人気タレントがニッコリ微笑んでいるだろうグラビアには、名門女学校の風景写真や、皇族華族をはじめとする名家の令嬢・令夫人のポートレートが登場した (斎藤、2000：137)。」と記している。小田部⁽⁸⁾ の著書⁽⁹⁾ にもこれを示す記事が掲載されており、当時の華族はさながら芸能人のような扱いだっただことがわかる。これについては「当時の女性にとっての『憧れの対象』がどういう人たちだったかがうかがえる (斎藤、2000：137)。」や、「上流女性たちとの関わりを示すことで雑誌自体の価値を高める意味もあった (小田部、2006：152)。」と分析されている。明治末期から大正にかけては、「野心や欲望は存在していても社会の中に焚きつけのモーターが設置されていなかった。逆に強力な冷却装置がそなわっていた (竹内、1997：17)。」時代なので、人々は上流階級を「憧れの対象」としてしか見ていなかったようである。だが、身分制度の崩壊により「立身出世の

過熱モーターが音をたててまわりはじめた（竹内、1997：20）」ことから、状況は変化して行く。橋本⁽¹⁰⁾によると、上流階級模倣への単なる‘憧れ’は、時代と共に「多くの人々に手の届くものとして認知されて（橋本、2006：18）。」行くのである。

メディアが発達した現代は、さまざまな媒体で人々の私生活が紹介されており、‘外見上の階層模倣’も盛んである。紹介される人物の中には、知名度の高い家系の者や事業での成功者もいるだろう。しかし同時に、多種多様な人物が「セレブ」と称され、紹介されている。中にはセレブと呼ばれたいがための、フィクションとして構成された‘ショー’も混在しているのではないだろうか。或いは、彼・彼女がセレブであろうとなかろうと、メディアで紹介されること自体が、その階層上昇を演出しているのかもしれない。

(2) 障壁としてのハビトゥスとは

しかし、そこには模倣だけではどうしても越えられない壁がある。それが「ハビトゥス」である。繰り返すが、ハビトゥスとはその階級における特有の習慣や行動様式のことである。だが、ハビトゥスは一時的な訓練ではなかなか身体化するまで浸透しない。佐藤⁽¹¹⁾はブルデューの定義を用いながら、「ハビトゥスとは教育によって培われた規範的な慣習的システムの総体のことであり、『ハビトゥス』から生じる実践、ふるまいが『プラティーク』である。たとえば、上流階級はクラシックコンサートへ行き、労働者階級は流行歌を聴くといった社会集団に特徴的な趣味なども、それぞれハビトゥスの表出としてのプラティークである（佐藤、2006：64）。」と述べている。その一例として、「たとえば、洋食をとる際のフォークやナイフといったカトラリー（食器類）の使い方は、単なる『知識』ではなく、しつけによって身についた『プラティーク』であり、『ハビトゥス』の表象である。」と言う。また、「マナー、立ち居振る舞いといった近代的な『プラティーク』は、人をリスpekタブルな者として際立たせるだけでなく、それを知らない者を『野蛮』で『下品』な者として格付けする（佐藤、2006：73）。」のである。

現代は自由な進学や消費ができるようになり、外見上の階層移動の模倣もできるようになった。だが、その模倣にはハビトゥスもきちんと付随しているのだろうか。「一九六〇年代くらいまでは、金持ちと貧乏人の差は、住処から着るものまで、みるからに歴然としていた（斎藤、2000：73）。」にも拘わらず、時代の変化と共に「階級」という言葉は廃れて来る⁽¹²⁾。しかし、2000年代に入ると、再び「『階級社会』という言葉が、普通に使われるようになる（橋本、2006：19）。」、つまり21世紀の日本社会においても「階級」概念は存在しているのである。しかし同時に、今では誰もが資産を作れば「セレブ」と称したり、称されたりしている。或いは資産などなくとも、セレブである‘ふり’をすることも十分可能になっている。身分制度が存在していた時代と比べて、階級についての概念が一種の混乱状態になっているからである。そして、我々もその混乱を見破ることが出来なくなっているのではないだろうか。

3. ‘見えるハビトゥス’ とはどのようなものか ～見えない選抜コード（基準）～

竹内は「ブルデューは文化やハビトゥスこそが目に見えない選抜コード（基準）である、という。（中略）したがって支配階級のハビトゥスを所有しない者は、学校での成功（学力や学歴）や職業的成功にハンディを背負わされていることになる（竹内、1993：148～149）。」と指摘している。言い換えれば「文化やハビトゥスが目に見えない選抜コード（基準）」になっている限り、それらが身に付いていることが前提となっている社会もあるのである。だが2で前述したように、ハビトゥスが「心の習慣」や「肌」「気質」と訳せて、「血肉化された持続する慣習」だとすると、ハビトゥスは容易に‘見て取れるもの’ではない。では、我々が外面的にハビトゥスを‘見よう’とすれば、人の何を見ればいいのか。外面的なハビトゥスとは何かを考察するにあたり、マナーと品格について言及しよう。

(1) マナーとは何か

人はなぜマナーを身に付け、守ろうとするのか。北山⁽¹³⁾は「礼儀作法が対象とするものは、社会生活における存在のあり方である（北山、2008：126）」と述べている。人がもしこの世で独り存在していたら、マナーや振る舞いの概念は存在しないかもしれない。なぜなら自分の好きに振る舞おうが、誰にも迷惑を掛けず、自分に対する世間の目もないからだ。マナーとは、相手を思いやる気持ちや決まり事のことだけではなく、他者が存在することを前提とした、社会における行動基準なのである。

ここでマナーを定義しておこう。本論文では、マナーとは公共の場において他者と自分の立場や距離感を公に表したり、維持するための手段であると考えられる。またそれによって、礼儀や教養が身に付いていることを、周囲に公示する手段にもなり得るのである。つまり、マナーには、周囲に対して自身を表現するための、‘ツール’としての利用価値があると考えられる。では、マナーだけで礼儀や教養を表現できるのだろうか。その他に何か身に付けているべきことはないのか。‘あの人は立ち居振る舞いが美しい’と言う表現がある。動作や所作の矯正目的としてマナーだけを身に付けても、それですぐに自然な美しい立ち居振る舞いができるようになるとは限らない。凜としながらも、場面に応じて自然に存在することは、そうたやすいことではあるまい。‘どのような場面においてもマナーが備わっていて、かつ、立ち居振る舞いが自然に美しくある’ために、人は何を身に付けているべきなのか。それこそ、ハビトゥス習得の有無が多いに影響しているのではなかろうか。品格をハビトゥスのひとつと置き換えていいのならば、北山はマナーとハビトゥスの関係を「上流階級の人々はマナーより品格のほうを重視している。マナーは品格のあらわれにすぎない。マナーを学ぼうとしても、品格がそなわっていなければ、それは真のマナーとはなりえないというわけだろう（北山、1994：167）。」と明確に指摘している。外見上の「マナー」だけを身に付けるのではなく、そこには「品格」が備わっていなければならないのである。

(2) 品格とは何か

では「品格」とは何だろうか。それを具体的な言葉で表すのは難解である。北山は「品格の基礎」として「肉体と感情をコントロールする能力」と「言語能力」(北山、1994:167)の2つを挙げている。前者は「歩き方、サロンの横切り方、座り方、手袋のはめ方(以下略)」など、「あらゆる状況」での「身体のかたち」であり、「身体のシルエットによって、その人間の育ちと教養がわかる、とまでいわれた(北山、1994:167)。」とある。日常生活でこれらの「身ぶり」を、考えながら行うのではタイミングを失するし、自然な動作にはならない。いかに自然に優雅に振る舞えるのか、その身のこなし方で「その人間の育ちと教養がわかる」ということだろう。後者の「言語能力」についてはどうだろう。「挨拶の仕方をその中心としながらも、その中には、発声、語彙、表現の仕方、たとえばaの音にアクセントをおいて長く伸ばすといったクセまでが、彼らなりのステータスの記号として習得されたのである(北山、1994:167)。」とある。この記述から思い出されるのは、映画「マイフェアレディ」である。登場人物の言語学者は、発音や発声からその人の出身地が判別できると言い、花売り娘の出身を細かい地区まで即座に言い当てる。映画のストーリーゆえ、これはいささか突飛な例ではあろう。だが、「言語能力」とは、「発声」や「アクセント」などから出身までが判断されてしまうという、分かりやすい一例と言えよう。「英国人は会話をすれば、訛り(アクセント)や語彙などから、相手の出身地域だけでなく出身階級がすぐわかる(竹内、1993:168)」と言う。英国人に限らず、ある人物が数分間も話をすれば、話し方や内容からその人のおおまかな出身や教養などは垣間見えてしまうものである。

(3) ハビトゥスとマナー、品格のつながりとはどのようなものか

以上までのことを、改めて整理しておこう。内面的なもの、マナーや品格のように外面的に認識できるものを含めて、それらが複合的に形成されたものが「ハビトゥス」なのである。また、公共の場において、相手と自分の立場や距離感を公に表したり、維持するための手段が「マナー」である。それを誇示することによって、マナーには周囲に自分が身に付けた知識や教養を表現するための、ツールとしての利用価値があると考えられる。しかしマナーの習得のみならず、日常的な立ち居振る舞いなどの身ぶりに代表される「品格」も持ち併せていなければ、ハビトゥスが身に付いたとは言いきれない。そして「品格」を具現化することは難しく、また、その形成は「ゆるやかな時間の中での、ごく自然なかたちで習得されて(北山、1994:166)」行くものである。以上のことから、ハビトゥスが一番表われやすいのがマナーであると言えよう。そして、本来ハビトゥスは「家庭や学校で長い時間をかけて無意識裡に形成され(竹内、1999:190)」るもので、だからこそ「当人にも意識されにくい『心の習慣』(大村英昭)のこと(竹内、1999:189~190)。」と、表現されるのである。これらが「育ちは学べもしないし、隠せもしないということである(北山、1994:169)。」といわれる所以なのである。

4. ハビトゥスの身体化とはどのように形成されて行くのか

では、幼少期から圧倒的な時間と環境の中で自然にハビトゥスを身に付けた場合と、そうでない場合とに見られる、ハビトゥスの特徴とはどのようなものなのだろうか。平たく表現すると、前者はハビトゥスが身体化して身に付いており、またケースバイケースでの自然な応用が可能だ。そして他者からの目を気にしていない。気にせずとも自然に振る舞えるからである。対して後者は、ハビトゥスがなかなか身体化するまでには及ばず、習った以外のシチュエーションでの応用が難しい、或いは、ぎこちない。では、ハビトゥスの身体化とはどのように形成されて行くのだろうか。

(1) ハビトゥス身体化の「条件」とは

もし、エチケットをマナーと読み替えてもいいのなら、『エチケットの文化史』⁽¹⁴⁾における作法書の流行と、現代の「セレブ」の増加傾向とは類似した背景があるように思われる。春山⁽¹⁵⁾によると、作法書は「十三世紀（春山、1988：339）」を皮切りに出版され続け、「十九世紀後半に、木材パルプの印刷紙が開発されて書物が量産され、たやすく庶民の手にわたるようになると、おびただしい作法書が生産されるように（春山、1988：338）」なってくる。なぜ、庶民のために作法書が大量生産されたのか。それは、「世の中には上流階級ビジネスというものが一〇〇年前くらいから存在するが、その商売の奥儀は、新興の中間層は自分のステイタスに自信がないために、上流階級グッズの誘惑には逆らえない、ということを感じて利用する（北山、1999：198）。」からである。しかし、「上流を自他ともに認める人々」にとっては、「大事なのは生活様式でなく品格（趣味、教養、動作）だ」という哲学が前提（北山、1994：165）」であった。また「品格の形成」には、「ラテン語、芸術教育（絵画、音楽、ダンス）文章訓練、（中略）サロンでの会話などを通して実現させるものだった。しかも習得には内容ばかりでなく習得の場所、すなわち文化的環境（住居、家具、絵画・彫刻のコレクション、使用人、家族、交際関係）と圧倒的な時間が不可欠の要素だったのである（北山、1994：165）。」と言う。だが、「そんな条件はだれにでも手に入るものではなかった（北山、1994：165）。」のである。

(2) 人がハビトゥスに向き合う時とは

『官能論』⁽¹⁶⁾「第6章上流の作法」に、「エチケットは、儀礼として公式に定形化されたものと各人のパフォーマンスに任された部分との両方からなっていた（北山、1994：157）。」との記述がある。この「各人のパフォーマンスに任された部分」は‘咄嗟における行為’であるとも解釈できよう。だとすると、この「各人のパフォーマンスに任された部分」こそ、身体化されたハビトゥスによるマナーや振る舞いから来る部分であろう。3-(3) で定義したように、ハビトゥスが一番現れやすいのがマナーだからである。

では、人はどのような時に自分のマナーや振る舞いについて考えるのだろうか。それは、自分の行動がその場にふさわしいのか不安な時、或いは他者との行動に差異を

感じる時などではないだろうか。北山は「『マナー』に比べると、『エチケット』という語の適用された意味範囲はずっと広がった（北山、1994：158）。」と前置きしつつ、エチケットは「社会的な場での自己表現、つまり人間関係の処理のノウハウすべてを指していたといつてよい（北山、1994：158）。」と述べている。現代においても、ハビトゥスが表れやすいマナーや振る舞いは、その結果次第で自分を取り囲む環境や自分への評価、人間関係に対して大きな影響を与えてしまう。具体的な場を挙げよう。若い世代なら、就職活動や冠婚葬祭などがきっかけとなることは多いだろう。社会人は、取引先とのパーティなど、若い頃以上に自分のマナーや振る舞いに気を使わざるを得ない。なぜなら、自分の言動次第で業務に重大な損失が生じる可能性があるからだ。そして、出世や結婚などにより自分自身の階級が上昇した場合は、付き合う人々や自分を取り囲む日常の「社会空間（北山、1994：158）」そのものが変化する。この場合、マナーや振る舞いの意味合いも‘一時的なもの’ではなく、‘日常的に意識せざるを得ないもの’となって行く。なぜなら「その社会で生きるほか（北山、1994：158）。」ない状態になり、自分が身に付けたハビトゥスがその「社会空間」の各場面とそぐわないと、その「空間」からの排除対象となり得るからである。その人の持つハビトゥスが「社会的な場での自己表現、つまり人間関係の処理のノウハウすべてを指（北山、1994：158）」すもの、になるのである。

(3) ハビトゥスは‘学べる’のか

これらをきっかけに、人は自分のマナーや振る舞いを意識し始め、知らず知らずのうちに自分のハビトゥスについて向き合っている。しかし、各場面がその人物にとって日常生活の範囲内であれば、別段不安を抱かない。なぜなら自分の経験知で対応可能であり、特に不安を抱いたり、意識的に努力したりする必要はないからである。「高級軍人や外交官の世界は貴族階級の専有物だった（北山、1991：332）」のも、彼らは幼い頃から無意識のうちに国際プロトコールや振る舞い、人脈までもが身に付いていたことによるからと言えよう。

フランスのベストセラー『BCBG⁽¹⁷⁾ ガイドブック』⁽¹⁸⁾ は「上流階級の生活様式をその総体において記述しようとしたもの（北山、1994：154）。」である。「記述」は多岐の項目に亘っており、これらを成長段階を過ぎてから習得しようとしても、相応の時間とエネルギーを要してしまう。結局のところ、「礼儀作法はマニュアルでは学べない（北山、1994：169）」のである。

5. 平等社会であるはずの 21 世紀日本における階級模倣

～誰もがセレブを語る世の中～

ここまでの考察からわかるように、ハビトゥスは一時的な訓練では、なかなか身体化するまでに至らない。特に自己が確立した成人後のハビトゥス習得は容易ではない。このことから、ハビトゥス習得をパッケージ化すること自体が 21 世紀社会の新たな問題とも言い得るだろう。だが、今は誰もがセレブを語る世の中だ。誰かについて一言「セレブ」と付け加えられると、人々はその人物がセレブなのだ、安易に信

じてしまう傾向があるのではないか。現代日本におけるセレブという言葉は、本来の‘Celebrity’とは違う道を歩み始めているかのようである。日本でも身分制度があった1800年半ばから1900年半ばまでにおいては、‘ノブレス・オブリージュ⁽¹⁹⁾’という概念があった。当時の上流階級は権力や権利ばかりではなく、自分の階級の義務を理解・実践しつつ暮らしていたのである。もちろん全員が実践していたとは限らない。だが、このような概念が存在していた限り‘実践していない人’は、少なくとも周囲から‘あの人は義務を実践していない’という目で見られていた可能性はあったであろう。しかし現代はどうだろうか。本物を見極められず、誰しものがセレブを語ることが可能な世の中で、様々な偽りも行われていないか。

2003年に起きた、偽有栖川宮家を語る披露宴詐欺事件は記憶に新しい。しかも、この披露宴の場所となったのは、世界でも有名な、ある高級会員制社交クラブ⁽²⁰⁾であった。駐日の大使夫妻ほぼ全員が会員として名を連ねるなど、このクラブは格式の高さで知られていた。しかし実際は、土日祝日に限り会員以外も利用可能だったことはあまり知られていないであろう。クラブ側は、この披露宴では単に場所提供をただけの意識だったかもしれない。だが、この偽宮の披露宴が‘詐欺事件’だったことそのものよりも、‘このクラブで行われた’という事実こそが、見方によってはより大きな問題であったとも考えられる。別の例を挙げよう。芸能界で活躍している「セレブ」が、番組で外国人に対して英語で‘I am Lady⁽²¹⁾ ○○’と自己紹介している場面があった。だが、Ladyの称号が使える対象者は、実際は貴族の正式な夫人と伯爵以上の爵位⁽²²⁾の貴族令嬢のみと限定されている。貴族令嬢であっても爵位の低い子爵・男爵の令嬢はLadyを名乗れない。従って、貴族制度の残る国や英語圏では、上記の該当者以外がこの自己紹介をすることは、本来はないのである。これらのケースに代表される例は、華やかなイメージ戦略を活用して、「セレブ」をツール化している一例だと言えよう。

言葉遣いの点で述べれば、山本⁽²³⁾は江戸時代の町人による「武士言葉の濫用」⁽²⁴⁾について「罰則や規制がないと、憧れなどからか下の身分の者に真似されていくのだ(山本、2001:187)。」と述べている。士農工商の別があった江戸時代でも、このような言葉遣いの真似があったのだから、山崎⁽²⁵⁾の言うように「急激に豊かになる社会では、(中略)ひとびとは自分がどんな階層に属しているかを見失ふとともに、欲望の限度についての常識的感覚をも失ってしまう(山崎、1984:104)。」のかもしれない。

人はなぜ、外見上の階級移動をしようとするのか。「身分の不安定性ゆえに、常に他者に見られ、他者の話題になることが彼女らの存在の必要条件となっていたから(北山、1991:327)」という背景もあるだろう。21世紀日本社会はさまざまな情報収集や確認が容易にできる社会である。それにも拘らず、アイデンティティーに関わる偽りや商業化が発生してしまうことから、そこにはかえって階級社会の壁が未だ見え隠れしているといえる。そして、情報収集や確認が容易な社会であるがゆえに、「外見重視(北山、1994:78)」の傾向はより「社会の全階層に浸透(北山、1994:78)」し、「外見上の階層模倣」もより多くなって来ているのである。

おわりに

～ 21 世紀日本社会において、ハビトゥス習得の追求を語るこの意味～

要は、たとえマナーや振る舞いだけが仮りに身に付いたとしても、それを応用する機会や場、人脈などが伴わない限り、本来のハビトゥス習得には至らないのである。「差異化はヨコに行われたのではなく、タテの方向に行われ（北山、1994：79）」ている。一見、平等であるはずの 21 世紀日本社会においても、平等でない場は少なくない。伝統ある各ホテルでは、ホテル自身が会員制クラブを設けていることが多いが、そのクラブの入会募集は公には行われていない。それどころか、ホテル内のレストランは館内案内が出ているのに、その会員制クラブのことは館内案内にも載っていない。クラブの存在や場所は、会員本人が知っていればいいことだからである。「ほんとうの上流階級しか行かない所（北山、1991：329）」は、我々には知り得ない情報として、依然存在しているのである。

ダイレクトに物や地位を狙うのではなく、‘パッケージ化—商品化—されたハビトゥス’に‘アクセス—消費—’している人たちは、本来あるべきもの一階級—を不可視化してしまっている。21 世紀日本社会は平等な社会であるはずである。だが、ハビトゥス習得を視点に述べるならば、生まれながらにハビトゥスを身体化する側の人間と、追ってハビトゥスに憧れる側の人間が、未だに分かれて存在しているとも言い得よう。結局は、21 世紀日本社会においても、未だに純然たる階級社会は機能しているのである。このことから、著者が当初、考察対象の 1 つと捉えていた‘ハビトゥス習得の立場から見る、21 世紀のアイデンティティー・クライシスの有無’ということよりも、それ以前に、平等であると思われていた 21 世紀日本社会に、未だ純然たる階級社会が機能していたこと自体が、‘21 世紀日本社会のアイデンティティー・クライシス’だったと言えるのではないだろうか。この指摘をもって本論文のまとめとしたい。

■註

- (1) 1869 年から 1947 年までの華族制度を指す。
- (2) BOURDIEU, Pierre., (1930～2002) フランスの社会学者。
- (3) BOURDIEU, P., “La Distinction I & II, critique sociale du jugenmet” ブルデュール、P., (石井洋二郎訳) 『ディスタクシオン (上下) : 社会的判断力批判』藤原書店 1990
- (4) 竹内洋 (1942～) 関西大学文学部教授、京都大学名誉教授。社会学者。
- (5) 原文は「慣習行動」に「プラチイク」とルビあり。
- (6) 斎藤美奈子 (1956～) 文芸評論家。
- (7) 「『婦人世界』『女学世界』『婦女界』」 「明治末期の発行部数は七～十万部 (斎藤、2000 : 137)」
- (8) 小田部雄次 (1952～) 静岡福祉大学社会福祉学部教授。歴史学者。専攻は日本近現代史。
- (9) 小田部雄次 『華族 : 近代日本貴族の虚像と実像』中央公論新社 2006
- (10) 橋本健二 (1959～) 武蔵大学社会学部教授。専攻は理論社会学 (階級論、マルクス主義社会学理論)。
- (11) 佐藤八寿子 (1959～) 元神戸ファッション造形大学専任講師。専攻は教育社会学、メディア論。
- (12) 「『階級』という言葉はほとんど死語と化していた (橋本、2006 : 13)。」

- (13) 北山晴一（1944～）立教大学名誉教授。大阪樟蔭女子大学教授。
- (14) 春山行夫『春山行夫の博物誌 エチケットの文化史』平凡社 1988
- (15) 春山行夫（1902～1994）詩人、随筆家
- (16) 北山晴一『官能論：人はなぜ美しさにこだわるのか』講談社 1994
- (17) ベーサー・ベージュ（Le Bon Chic Bon Genre）仏パリの上流階級のシックで趣味のよい服装や持ち物、ライフスタイルなどを指す。
- (18) T. マントゥ（MANTOUX, Thierry.）著（伊藤緋紗子訳）『フランス上流階級 BCBG』光文社 1990
- (19) 「ノブレス・オブリージュとは、『高貴な者にはそれにともなって大きな義務がある』ということ（小田部、2006：72）」
- (20) 英国資本で世界各国にクラブを持つ。日本では 1989 年にオープンしたが、2010 年に経営破綻した。
- (21) a [L：称号として] 侯爵夫人 [女性侯爵]・伯爵夫人 [女性伯爵]・子爵夫人 [女性子爵]・男爵夫人 [女性男爵] の略式の敬称、b 公爵、侯爵、伯爵の令嬢に対する敬称 研究社「新英和大辞典第 6 版第 1 刷」2002 年 P1377 Lady の項より引用
- (22) 爵位は高い順から公爵、侯爵、伯爵、子爵、男爵。従って侯爵以上とは公爵、侯爵、伯爵を指す。
- (23) 山本博文（1952～）東京大学大学院情報学環教授。東京大学史料編纂所教授。歴史学者。専攻は日本近世史。
- (24) 「本来は武士の娘でなければ『お嬢さま』ではなかった。町人までもが、自分の娘を『お嬢さま』と呼ばせるというので中には、『これはけしからん』と憤っている武士もいた（山本、2001:187).」
- (25) 山崎正和（1934～）大阪大学名誉教授。劇作家、評論家。

■参考文献等

- 小田部雄次『華族 近代日本貴族の虚像と実像』中央公論新社 2006
- 北山晴一『おしゃれの社会史』朝日選書 1991
- 北山晴一『官能論 人はなぜ美しさにこだわるのか』「第 6 章上流の作法」講談社 1994
- 北山晴一『衣服は肉体になにを与えたか：現代モードの社会学』朝日選書 1999
- 北山晴一『世界の食文化 フランス』農山漁村文化協会 2008
- 斎藤美奈子『モダンガール論 女の子には出世の道が二つある』マガジンハウス 2000
- 佐藤八寿子『ミッション・スクール—あこがれの園』中央公論新社 2006 年
- 竹内洋『パブリックスクール 英国式受験とエリート』講談社現代新書 1993
- 竹内洋『立身出世主義 近代日本のロマンと欲望』NHK ライブラリー 1997
- 竹内洋『日本の近代第 12 巻 学歴貴族の栄光と挫折』中央公論新社 1999
- 橋本健二『階級社会 現代日本の格差を問う』講談社選書メチエ 2006
- 春山行夫『春山行夫の博物誌 エチケットの文化史』平凡社 1988
- 山崎正和『柔らかな個人主義の誕生』中央公論社 1984
- 山本博文『江戸の雑学 武士は禿げると隠居する』2001 双葉社
- BOURDIEU, P., *“La Distinction I & II, critique sociale du jegenmet”*
- ブルデュール、P. (石井洋二郎訳)『ディスタクシオン (上下)：社会的判断力批判』藤原書店 1990
- BOURDIEU, P., *“Le bal des celibataires’ crise de la société paysanne en béarn*
- ブルデュール、P. (丸山茂、小島宏、須田文明訳)『結婚戦略：家族と階級の再生産』藤原書店 2007

MANTOUX, T., *“Le Bon Chic Bon Genre”*

ティエリ、M. (伊藤緋紗子訳) 『フランス上流階級 BCBG』 光文社 1990